

保育計画成果報告書

法人名	学校法人ろりぽっぷ学園
施設名	ろりぽっぷ泉中央南園
報告者(役職)	佐藤 眞弓 (園長)
住所・連絡先	宮城県仙台市泉区泉中央南園 9 番地
	☎ 0 2 2 - 3 7 1 - 2 8 3 3
	E-mail hinatabokko@lollipop.ed.jp

○タイトル (保育計画)

飼育活動がもたらす「子どもの学び」 ～身近な生き物の命を守りたい・育てたい～

○主な助成備品

ビオトープ施工一式

1. 保育計画策定の目的

「先生、たんぽぽが笑っているよ」「葉っぱがダンスをしているみたいだね」など戸外へ散歩に出かけた子どもたちは、生活体験の中で心を動かして自然の神秘さを感じている毎日です。

当園では、子どもの“意欲的・自発的遊び”の一つとして自然体験活動を大切にしています。この自然体験を通して主体的に遊びながら、子どもの持つ「感性」を豊かに育むことのできる活動であると考えています。

散歩で見つけたあぜ道の水たまりに、おたまじゃくしが泳いでいることに興味を示した子どもたちは「夜は寒くないかな…」と言葉を持たない小さな生き物に心を寄せながら愛着を持つ姿がきっかけとなって、園内での飼育活動への取り組みが始まりました。この飼育活動を通して、身近な生き物への愛着や探求心を深めていく姿や責任感、共感性さらには他児との関わりが深まることを願いました。

そしてこの飼育活動を大きく展開できるものとして園庭にビオトープを作り、生き物との接触が多面的な教育効果に繋がり、一つ一つが子どもの学びになると考えました。

2. 具体的な実施内容

①「園内で飼育をしてみよう！」

子どもたちが示した生き物への興味や関心を広げるために、園内で飼育できる環境を作ったことで毎日水槽を覗き込む姿がありました。



【考察】生き物の形や泳ぎ方、金魚とメダカの様々な違いにも興味を持って観察する姿があり、興味や関心を持つことが学びのきっかけになっていました。

②「金魚が死んじゃった！」

飼育している金魚やメダカが次々と死んでしまう日が続き、悲しい表情を見せる毎日でした。

【考察】なぜだろう・・・と死んでしまう理由を一人ひとりが真剣に考え、生き物の「命」についての意識が出て来ました。



③「お墓を作ってあげたい」

子どもたちは金魚が死んでしまうことについて話し合いを始め「エサがなかったのかな」「水が汚くて苦しかったのかな」「小さいお友だちが水槽を叩いていたからびっくりしたのかな」と、自分なりの思いを言葉にしている姿が見られました。

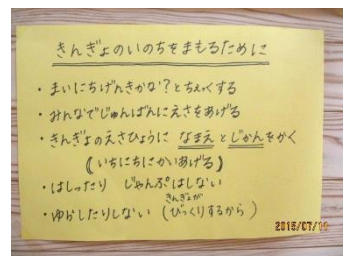


【考察】自分なりに死んでしまった理由を考えながら、友だちの意見に共感したり、自分の思いを伝える姿が見られました。

④「残った金魚やメダカの命を守りたい！」

4・5歳児が集まって考えた“命を守るためのルール”を保育者に話し、貼り紙に記入してもらうことで小さなクラスの友だちにも伝えようとしていました。

【考察】文字を読める4・5歳児が小さな友だちにルールを読んで聞かせ、“命を守る責任感”が表れてきた場面が多く見られました。



⑤「命を守ろう作戦開始！」

水が汚れないように水替えを積極的にする年長(5歳児)の子どもたちでした。

【考察】命を守るために必要な水を一滴もこぼさないように“協力”して運び、他児との繋がりが広がっていました。その行動を見ていた3・4歳児も一緒に手伝いたいという気持ちが芽生え、“異年齢児の関わり”が見られました。



⑥「あれっ？何だろう？」

メダカの水槽に入っている水草の下に小さな丸いものが付着しているのを発見。「もしゴミだったら早く取ってあげないと、また死んじゃう」「でもゴミじゃないみたい」と心配そうに覗き込む様子がありました。



【考察】毎日、興味や関心を持って見ている子どもたちが異変に気づき、再び観察しながら、どうしたら良いのかと解決方法を考え始めました。

⑦「川の博士なら知っているかもしれない」

水草の下に付いているものが気になっている子どもたちは先日、来園した川の博士に電話をかけて、自分の言葉で状況を伝えていました。



【考察】水草の下に付いている小さな丸いものがメダカの卵だということを知り“新しい命の喜び”を感じている様子でした。

⑧「メダカのお母さんが赤ちゃんを食べちゃうの？」

川の博士から親メダカは卵を食べてしまうから水槽を別にした方が良くことを教えてもらい、小さなボウルに移し替えて心配そうに見つめている毎日でした。



【考察】メダカの特性を知り、小さな命を守ってあげたいという“愛情”と“責任感”が募っていきました。

⑨「やったー!!赤ちゃんが生まれた」

子どもたちは毎日毎日、胸をドキドキさせながら水槽を覗いていました。そしてある日メダカの赤ちゃんが生まれ、泳いでいるのを発見。



【考察】1～5歳児までの子どもたちがメダカの赤ちゃん誕生を喜んでいました。この小さな命の誕生をきっかけに、今まで飼育活動に興味を示さなかった子どもも水槽を覗き込むようになり、共感性が見られました。

⑩「わぁ、すごいね！目がふたつあるんだね」

赤ちゃんが生まれたことを川の博士に電話で報告をした子どもたち。すぐに博士は顕微鏡を持って来てくれました。あまりにも小さくて、なかなか肉眼で見るのが難しかった観察も顕微鏡を覗き込むことで、メダカの体のつくり(構造)にも興味を示すようになりました。



【考察】子どもたちの興味の広がりには保育者も驚くばかりでした。毎日、送迎をする保護者も子どもと一緒に水槽を覗き込み、園全体で飼育活動に大きな関心を示すようになりました。

⑪「大きなお家を作ってあげるんだ！！ビオトープ作り開始」

ビオトープを作るために“大きな石を集める”ことを知り、友だちと力を合わせながら大きくて重い石を何度も運搬していた子どもたちでした。メダカのために大きな家作り(ビオトープ)の完成を目標に最後まで頑張る姿が見られました。



【考察】子どもにとっては、とても大きく重い石を運ぶのは難しかったようです。しかし、どうやったら園まで運んでいけるのか、一度にたくさんの石を運ぶ方法などを相談し、試行錯誤を繰り返していました。

⑫「あとどれくらいで完成するのかな…」

完成することを心待ちにしている子どもたちでした。施工業者の方々に教えてもらいながら自分たちでできることを試行錯誤して手伝いました。少しずつ出来上がっていくビオトープに期待が高まっている様子がありました。



【考察】何度も業者さんに相談をしながら、汗を流して手伝っている年長児の姿がありました。石のそばに小さな年齢の子どもがやって来ると危険なことを知らせてあげる優しい姿も見られました。

⑬「やったー!!大きな家が完成だぁ」

小さなメダカに心を寄せながら、一生懸命にビオトープ作りを最後までやり遂げた子どもたち。友だちと協力することで達成感を十分に味わうことができました。

【考察】試行錯誤しながらビオトープ作りに挑戦したことで、一人で出来ないことも仲間がいるからこそ出来た達成感を十分に味わい、自分たちにもできるんだという自信が持てるようになっていました。



3. その成果と評価

子どもの学びは、保育者が教え込む方法で身に付けていくものではなく、園生活での様々な体験が興味や関心を持つきっかけになりました。一人ひとりが主体的に飼育活動に取り組むことで心を揺さぶりながら小さな生き物への“愛着・探求心・責任感・共感性”が育まれ、また他児との関わり・対話の増加に繋がりました。言葉を持たない小さな生き物の命を大切にしようとする思いやりのある優しい子どもたちの姿がとても嬉しく感じました。

飼育活動を通して試行錯誤しながら取り組んだ一つ一つのすべてが“子どもの学び”へと繋がっていきました。

4. 今後の課題と展望

仙台は四季折々が感じられる恵まれた環境にあります。季節に応じた様々な自然の変化を感じながら、夏の暑い季節にはどのように小さな生き物を育て守ってあげれば良いのか、また雪が降る冬の寒い季節にはどうしたら良いのか等、自然に触れて感じながら、子どもたちが意欲を持って飼育活動が展開できることを願いたいと思います。また今後はビオトープに植物を植え、そこに生き物がやって来ることで生態系についても子どもたちが学ぶことのできる環境を作っていきたいと考えております。



【毎日ビオトープを覗きメダカを探す姿】



【雨水を利用して注ぎ込み水温上昇を防ぐ】

以上